

聖書：ヨハネ 1：9～13

説教題：神の子どもとされる特権

日時：2015年12月20日（朝拝）

クリスマスの出来事が9節では「まことの光が世に来た」という出来事として記されています。私たちの周りには様々な光があります。たとえばその一つに蛍光灯のような光もあります。真夜中でも24時間営業のコンビニに行けば、明るい光を放っています。その店に入ればホッと一安心し、自分は光の中を歩んでいるというような気持ちにもなります。あるいは自然の光もあります。朝日を見るとすがすがしい気持ちになります。今日も一日頑張るぞ～という気持ちになります。元旦に初日の出を見に行く人々も、そこに光がもたらす特別な力を何か感じるからでしょう。またある意味で人間も光を放っています。神のかたちに造られた存在として、神を映し出す輝きを今なお色々な面で放っていると言えます。しかしこれらの光は「まことの光」ではありません。この「まことの光」とは、すべての光の本源という意味です。ですから私たちが光の中を歩むために、また私たち自身の光を輝かすために、どうしてもこの方とのつながりが必要です。そういう基本的な必要に加えて、もう一つの意味でも私たちはこの方を必要としています。すなわち私たちは罪によって本来の光を大いに失った者たちです。今やほとんど闇の中を歩んでいるような私たちです。そんな私たちのところに「まことの光」なるお方が来てくださったというのがクリスマスです。光が分からなくなり、暗やみに坐していた私たちにとっては、大いなる希望と救いの出来事です。ところがこのまことの光がこの世は歓迎しなかったということが語られています。二通りの仕方で語られています。

一つ目は10節にある通り、「世はこの方を知らなかった」。10節に「この方はもともとから世におられ、世はこの方によって造られたのに」とあります。招詞でお読みいただいた1章1節に「ことばは神であった」とありました。また1章3節に「すべてのものは、この方によって造られた」とも言われていました。ですからこのクリスマスの時に、キリストは特別な意味でこの世に来られたとは言え、そのキリストは神としてもともとからこの世におられたのです。また世界はこの方によって存在させられていたのです。なのに世は、この方がクリスマスの時に「すべての人を照ら

す光として」来た時、この方を知らなかった。本来大いに感謝して歓迎すべきであったのに、その誕生を知らなかった、気に留めなかった、無関心であった。これは罪による無知と言えます。大事な大事な、私たちに存在にとってかけがえのない方が来られたのに、この方を認めず、何も特別なことはなかったかのように生活したのです。

もう一つは 11 節です。「この方はご自分のくにに來られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。」 先の 10 節は世界全体について述べたものですが、こちらの 11 節は神の民イスラエルのことを述べたものです。キリストは一人の人間としてこの世に誕生するために、どこかの国に属する者として生まれて来なければなりません。そこで旧約時代を通して、その準備がなされて来ました。神は信仰の民イスラエルを作られ、預言や様々な儀式や制度を通して救い主を送るための準備をして来ました。そして時満ちて、ついにまことの光キリストが遣わされました。ところがこの方をこの国の人々が受け入れなかった。イエス様が誕生した夜、宿屋にいる場所がなかったことも、そのことを象徴しています。イエス様のその後の生涯も然りです。イスラエルはこの方を受け入れず、十字架の上に捨てました。なぜでしょうか。簡単に言えば、それは自分たちの願うような救い主ではなかったからです。自分たちを高く上げてくれる救い主ではなかったからです。低い姿で入って来られたお方の前に彼らはへりくだりたくありませんでした。またそのお方の光の前で自分たちの罪や偽善が暴き出され、白日の光の下にさらけ出されることが我慢ならなかった。そのため、キリストはご自分の国に來たのに、その人々から拒絶されたのです。

果たして今日はどうでしょうか。今は世界中でクリスマスが祝われています。しかし世はこの方を受け入れているのでしょうか。一時のお祭りとして、自分のしたいように時間を過ごし、自分勝手な仕方での時を楽しんで、後は何事もなくこのことを忘れる生活をしているのではないのでしょうか。ですから「世はこの方を知らなかった」という状態は今でも当てはまるのではないのでしょうか。世はこの方を「受け入れなかった」という状態は今も続いているのではないのでしょうか。

今日の御言葉が語る二つ目のメッセージは、しかしそこにはこの方を受け入れた人々もいた！ということです。この世が全体としてこの方に無関心で、また長い間準備を重ねて来たイスラエルの民もこの方を拒絶したことにより、この神のわざは失敗したと思われたかもしれません。無に帰したと思われたかもしれません。しかしそうではありませんでした！そこには受け入れた人々もいたことが 12 節に記されています。この「受け入れた人々」は「その名を信じた人々」とも言われています。名前はその人自身を表します。ですから「その名を信じた人々」とは、キリストご自身に全幅の信頼をもってよりかかった人々ということです。イエス・キリストの十字架と復活に代表されるみわざによりかかり、この方により頼むことです。

その人々には大きな特権が与えられることがここに述べられています。それは「神の子どもとされる特権」です。私たちはイエス・キリストを信じて、たださばきから救われるだけではありません。それらの祝福とともに「神の子どもとされる」特権も与えていただくのです。これは一言で言って、神に特別に愛される者になるということでしょう。自分の子どもに対する親の愛は特別です。キリストを信じる人はそのように全能の神を父として持つ人になる。全能なる神に特別に愛される者になる。従ってあらゆる心配はもはや不要。すべての上に主権を持つ方が守ってくださる。必要を豊かに満たしてくださる。もちろんこれは何でも私たちの思う通りに行くということではありません。子どもが願うことを全部かなえてあげるのが良い親ではありません。親は子どもよりは何が良いことで、何が良くないかを多少なりとも知っている者として、時には子どもが喜ばない訓練を与えなければならないこともあるでしょう。懲らしめを与えなければならないこともあるでしょう。しかしそれらはみな愛から出ていることです。神はなおさらご自身の子どもに対しては、その完全な知恵と最善の計画とによってそのことをされます。そうして私たちを究極的な益のために、最終的な祝福に至るように導いてくださいます。

そして今日の箇所が語るもう一つのことは、これは神による新しい誕生であるということです。これまでのところで多くの人がキリストを受け入れない中、ある人々はこの方を受け入れたということを見て来ました。ではなぜこういう特別なことが起こったのか。イエス・キリストを受け入れ、信じた人々に、何か特別に優れ

た点があったからなのか。その人々に霊的洞察力があったからなのか。確かにその人々が自分の意思をもってイエス様を受け入れ、信じたのです。しかし13節から分かることは、これは究極的に神のみわざであるということです。すなわち私たちに何か優れた点があったから、イエス様を信じることができたのではない。他の人と同じく罪の中にあった私たちが、どうして自分の力でイエス様を認め、信じることができたでしょう。それは神が特別な恵みをその人に与えてくださったからに他なりません。神がその人を新しく誕生させてくださったからに他なりません。その神の働きを頂いてこそ、私たちは初めてイエス・キリストを認め、信じることができたのです。これはただ神の恵みによることなのです。

13節に、この人々は「血によってではなく」とあります。これはユダヤ人が自分たちの民族的血筋を誇っていたことと関係します。その血筋ゆえに救われるのではない。また「肉の欲求や人の意欲によってでもなく」とあります。これは字義的には性的な欲求や、夫の側でのリード等によるのではないという意味です。人間の誕生には、このような人間の意図や計画が関わっています。しかし霊的な誕生はそうではない。それは人間の考えや行ないによるのではなく、ただ一方的な神の恵みによるのです。

私たちはこのことを自分の体験を通して知っているでしょう。私たちは様々な経緯の中で福音に触れ、そこに差し出されているイエス・キリストを信じました。しかし後になって分かって来ることは、実は私がこのようにできたのは神が私に働いてくださったからだということです。神が私を新しく誕生させ、私の心の目と耳を開いてくださったので、私はこのように信じる者とさせていただいたのだということです。ですから私たちは最初は「私がイエス様を信じました」と自分を主語にして語るのですが、だんだんと「私は救われました」と受身形で語るようになるのです。そしてこのことは正しいのです。「私は神によって新しく誕生したことが分かりました。だから私は信仰に入ります。」という順序で進む人はいません。私たちに命じられていることは、イエス・キリストを信じなさいということです。しかしその招きに従う中で分かって来ることは、これは単なる人間の決断によることではなく、神の恵みによることなのだということです。ですから私たちは信仰において

も自分を誇ることなく、全ての栄光をただ神に帰すのです。

このように私たちの救いは究極的には神のわざだからと言って、私たちには何もすることがないかのように考えるべきではありません。人を新しく生まれさせてくださるのは神ですが、神はこのことを御言葉を用いて行われます。ヤコブ書 1 章 18 節：「父はみこころのままに、真理のことばをもって私たちをお生みになりました。」 I ペテロ 1 章 23 節：「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることはない、神のことばによるのです。」 御言葉をバイパスして神が突然ある人を新しく誕生させることは通常ありません。ですから救いを得たいと願う人は御言葉に聞き続けなければなりません。その中で私たちはキリストを信じるように導かれるのです。そしてもし私たちがキリストを信じる者へと導かれたなら、それは神がその人を新しく誕生させて、そのように導いてくださったということなのです。

今朝はこうして、ただ神によって新しく生まれた兄弟の洗礼式を取り行なうことができること、大いなる感謝です。多くの人々がまことの光なるお方を知らず、このお方を受け入れない中で、こうしてそのお方を受け入れ、その名を信じる魂を神が起こしてくださいました。私たちは兄弟の信仰告白と洗礼式に立ち会うことを通して、今もこの恵みのわざをなして下さっている神を賛美したいと思います。また私たち自身もただ神の恵みによってこの特権にあずかせていただいていることを感謝したいと思います。願わくは、神がこれからも御言葉を通してこの特権にあずかる方々を多く起こしてくださいますように。そのために神とともに福音を一層宣べ伝える使命に励む教会の歩みでありたいと願います。